

# ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

## 道真の旅

梅の香と、歌と、人のやさしさと



伝説 道真の旅

梅の香と、歌と、人のやさしさと

紀行 道真の旅

- ・菅原道真
- ・長洲天満神社
- ・匂いの梅と板宿天満宮・網敷天満宮
- ・播磨路の道真

関連情報 用語解説

参考書籍

所在地リスト

## 道真の旅

### 梅の香と、歌と、人のやさしさと

菅原道真（すがわらのみちざね）は、今から1150年ほど昔、平安時代の人です。学問にたいへんすぐれた人で、「天神様（てんじんさま）」といえは知っている人も多いでしょう。道真は、その学問を認められて右大臣という高い位につきましたが、それをこころよく思わなかった藤原氏の陰謀（いんぼう）にあい、九州の大宰府（だざいふ）へ送られて、その地で亡くなってしまいました。

道真が亡くなった後で、人々はそのたたりを恐れて、神様として祭るようになりました。これが現在の天神様なのです。「学問の神様」として、天神様は全国各地でまつられています。

道真は、山陽道（さんようどう）で大宰府に下ったそうですが、摂津（せつつ）には道真が船で旅をしたというお話が残っています。そのころの船は、櫂（かい）でこぐか、帆（ほ）に風を受けて進むしかありませんでした。ですから一度に長い航海をすることがむずかしく、所々の港に立ち寄りながらの旅だったようです。

## ねぎ作らず・鶏飼わず

道真が大宰府に下るとちゅう、長洲（ながす）というところで潮待ちをすることになりました。長洲は、現在の尼崎市（あまがさきし）内にあたります。道真が、「ここはどこか」と村人にたずねたので、村人が「ここは長洲と申します」と申し上げたところ、「大宰府に流される身が、しばらくとどまる場所もやはり『ながす』というのか」となげいて、次のような歌をよみました。

## 人知れず おつる涙（なみだ）は 津の国の 長洲と見えて 袖（そで）ぞ朽（く）ちぬる

これを聞いた村人たちは、心から道真を気の毒に思いました。あたりに育っていた木や草までもがしおれてしまって、道真の悲運に同情したのですが、川上から流れてきたねぎだけはしおれずにしゃんとしていましたので、村の人はにくらしく思って、それ以来、長洲の村ではねぎを作らなくなったということです。

いよいよ道真が出航する日が明日に迫り、一番鶏（いちばんどり）の声を合図に出航と決めました。その夜、道真をよく思っていない者が、鶏小屋のとまり木になっている竹に、熱い湯を流しました。鶏（にわとり）は、足をあたためられ、もう夜が明けたのかとかんちがいして、高く鳴いたのです。

夜明けにはまだ早かったのですが、一番鶏が時を告げたので、道真たちの船はしかたなく出航してゆきました。後になって、村人たちは鶏がかんちがいして鳴いたことを知り、その後、鶏を飼うことをやめてしまったということです。

## 板宿の飛び松

長洲を出発した道真たちは、よい風を待つために和田岬（わだみさき）に立ち寄りました。上陸してみると、どこからともなく花の香りがただよってきます。

「これは、なんとすばらしい梅の香りだ。いったいどこにさいているのだろう。」

花の香りにさそわれるように、道真が歩いてゆくと、苅藻川（かるもがわ）が海に注ぐあたりにかかる真野の継橋（つぎはし）のたもとに、一本の梅がたくさんの花をつけているのでした。

## 風寒み 雪にまがへて 咲く花の 袖にぞうつれ 匂（にお）ふ梅が香

道真はさらに西へと道をたどります。そのうちふっと、都の屋敷に残してきた木々のことを思い出しました。道真は、庭の木々の中でも、梅、桜と松をとりわけかわいがっていたのです。道真が九州へ流されると決まったとき、桜の木は悲しんでかれてしまいました。また、梅の木は、西へと旅する道真のところへ、東風に乘せてよい香りを送り、なぐさめてくれました。

ところが松の木からは、何も音沙汰（おとさた）がありません。

「梅や桜が、わたしの運命を悲しんでくれているのに、あの松は何とつれないことか。」

道真が思わずなげくと、その言葉が聞こえたかのように、松の木は、京の都から空を飛んで、あっという間に道真のところへやって来たということです。

道真がこの地を去った後も、松の木は残り、やがて天にそびえる大きな木になりました。その姿ははるか遠く、現在の大阪湾のあたりからも望まれ、長い間、船乗りたちのよい目印になったといえます。

現在、苅藻川の梅の木があったあたりは梅ヶ香町（うめがかちょう）、道真が休むために板で仮の小屋を作った所は板宿町（いたやどちょう）、松が飛んできた所は飛松町（とびまつちょう）と呼ばれています。

## 紀行「道真の旅」

## 菅原道真

毎年受験の時期になると、各地の天神様は祈願に訪れる学生で繁盛する。いかに優れた人だったとはいえ、藤原氏の陰謀のために左遷された晩年を考えると、どうしてこんなに人気があるのかと不思議な気もするが、どちらかという悲運の人をひいきするのが、日本人の気質なのかもしれない。神様に祭り上げられた菅原道真（すがわらのみちざね）も、さぞやあの世で苦笑していることだろう。

道真が右大臣から大宰府に左遷されたのは、延喜元（901）年である。中央行政府の中心的地位から、出先機関の次官に落とされたのだから、道真の悲嘆はいかばかりであったろう。そのせいもあってか、大宰府に行ってもわずか3年で没している。

兵庫県に残る伝説は、どれも、道真が都から九州へ下る途中の物語である。

## 長洲天満神社



鳥居



境内



拝殿

長洲天満神社（ながすてんまんじんじゃ）は、尼崎の市街地のまん中にある。長洲という地名からは、河口に開けた浜を想像するけれど、今の海岸線までは5kmほどもあるだろうか。源頼朝（みなもとのよりとも）に追われた義経（よしつね）主従が、西国へ逃れようと船出した大物（だいもつ）は、長洲のすぐ南である。



神社を訪ねたのは早朝であった。隣にはしる道も、まだ車が少ない時間帯であったが、一人、また一人と参拝に訪れる人が、皆熱心に拝んでいるのには驚き、感心させられた。町中の神社だから、神秘的とか荘厳といった形容詞は当たらないが、多くの氏子さんが熱心に守ってこられたのがよくわかり、うらやましいような気もする。



境内の南に、「菅公足洗の池」がある。船から下りた道真が足を洗ったという池だが、今はコンクリートで固められている。



菅公船つなぎの松石碑



説明板

神社から500mほど東の、長洲小学校北門わきには、菅公船つなぎの松跡がある。道真が船をつないだ松の木があったといい、石碑が立っている。元の松は枯れてしまい、今は若い松が植えられている。

長洲の周辺では、道真の古跡が、今もそれぞれ大切にされている。道真をわずかな時間早立ちさせた鶏を飼わず、道真のためにしおれなかった葱（ねぎ）を作らないなど、心から道真を慕った伝説の心は、大都市として発展してからも消え去ってはいない。



大物橋跡の石碑

大物主神社と大物橋  
(撰津名所図会)

大物主神社



大物主神社



説明板

## 匂いの梅と板宿天満宮・網敷天満宮

### 菅公匂いの梅

菅公匂（にお）いの梅旧跡は、JR兵庫駅と新長田駅のほぼ中間、長田中学校近くにある。現在は石碑だけがその跡を伝えるだけである。伝説どおり、ここから板宿八幡神社（いたやどはちまんじんじゃ）あたりまで歩くとなると相当の距離である。

### 板宿八幡神社と天満宮

板宿八幡神社は、板宿駅北西の尾根の上にある。板宿駅から妙法寺川に沿って、坂道を500mほど上り、そこからさらに住宅街の細い道を上った尾根の上に神社がある。境内の一角に小さな宮があって、この中にかつて境内にあった飛松の株が残されている。境内からの眺望は素晴らしく、晴れて澄んだ日なら大阪の山まで見えそうだ。この飛松が、若々しい葉をつけていたころには、船人たちの目印になったというのもうなずける。



板宿八幡神社



板宿八幡神社の拝殿



飛松天神社



飛松天神社



ここでも目につくのは、合格祈願の絵馬である。生真面目なものから、いかにも現代風のものまで、道真さんへのお願いはひきもきらない。



### 網敷天満宮

板宿八幡宮の南西2km少しの所には、網敷天満宮（つなしきてんまんぐう）がある。ほぼ同じ故事を伝える網敷天満宮は福岡県にもあるので、上陸した道真に、漁師が網を敷いて座を作ったという話は、広く語られていたのかもしれない。

社殿は新しい町中の天満宮だが、参詣（さんけい）に訪れる人は多いようだ。



鳥居から拝殿を見る



拝殿

## 播磨路の道真

須磨（すま）を経た後、道真は山陽道で西を目指した。太政官の命令は途中の駅家にも発せられていて、乗り継ぎの馬や食料も与えてはならないという、実に厳しいものであった。いかに道真憎しとはいえ、意地の悪い命令である。途中、明石（あかし）の駅に立ち寄った道真は、旧知の駅長に「駅長、時の変改を驚くなかれ。一栄一落、これ春秋。」という漢詩を与えたという。明石の休天神には、菅公腰掛け石があるという。

さらに西には、加古川市（かがわし）の浜宮天神社（はまのみやてんじんしゃ）、高砂市（たかさごし）の曾根天満宮（そねてんまんぐう）、赤穂市（あこうし）の坂越天満宮（さこしてんまんぐう）と、山陽道に沿って道真が立ち寄ったという伝承地が連なっている。

## 用語解説

### 【菅原道真】すがわらのみちざね

平安時代前期の公卿（くぎょう）、学者（845～903）。菅公（かんこう）と称された。幼少より詩歌に才能を発揮し、33歳で文章博士（もんじょうはかせ、律令政府の官僚養成機関であった大学寮に置かれた教授職）に任じられた。宇多、醍醐両天皇の信任が厚く、当時の「家の格」を越えて昇進し、従二位右大臣にまで任ぜられた。しかし、道真への権力集中を恐れた藤原氏や、中・下級貴族の反発も強くなり、左大臣藤原時平が「齊世親王を立てて皇位を奪おうとしている」と天皇に讒言（ざんげん）したことで、大宰権帥（だざいのごんのそち）に左遷され、同地で没した。

### 【天神】てんじん

天神は、本来「天の神」を指し、雷や雨の神として信仰されていた。しかし菅原道真が大宰府で没した後、京都では落雷の災害が頻発し、また醍醐天皇の皇子が次々と亡くなったため、これを道真のたたりと考えた朝廷は、京、大宰府に天満宮を置いて怨霊（おんりょう）を鎮めようとした。これ以降、道真を天神とする信仰が広がり、道真が優れた学者であったことから、学問の神としても信仰されるようになった。

### 【大宰府】だざいふ

中世以降太宰府とも表記するが、歴史用語としては「大」の字を用いる。

7世紀後半に、九州の筑前国（ちくぜんのかくに）に設置された地方行政機関。外交と防衛を主任務とすると共に、西海道9国（筑前、筑後、豊前、豊後、肥前、肥後、日向、薩摩、大隅）と三島（壱岐、対馬、種子島の行政・司法を所管した。与えられた権限の大きさから、「遠の朝廷（とおのみかど）」とも呼ばれる。

### 【右大臣】うだいじん

律令政府における最高機関であった太政官の職のひとつ。太政大臣、左大臣に次ぐ地位である（ただし太政大臣は常に置かれるものではなかったため、実質的には第二位の職）。

左大臣を補佐する。菅原道真は899～901年に右大臣をつとめた。

### 【絵馬】えま

寺社に祈願するとき、および願いがかなってその謝礼をするときに奉納する、絵が描かれた木の板。奈良時代には生きた馬（神馬、しんめ）を奉納していたが、馬を奉納できない者は次第に木や紙、土で作った馬の像で代用するようになり、平安時代から板に描いた馬の絵で代用されるようになった。

## 【大物】だいもつ

大物浦は古くからの物流の結節点で、海の輸送と川・陸の輸送との変換点であった。海上を運ばれた物資はここで川船に積み替えられて都へ運ばれ、また西国を目指す人々にとっては海の玄関口でもあった。謡曲『舟弁慶』ゆかりの地としても知られている。『平家物語』にも記述がみられ、源頼朝に疑われ都落ちを決意した義経が、西国を目指して船出したのが大物浦であるという。大物浦にある大物主神社（おおものぬしじんじや）には、義経主従が一時身を潜めたという言い伝えが残り、境内には「義経・弁慶隠れ家跡」の碑がある。海上交通の要衝として栄えた大物の地にあるこの神社に、自分たちの航海の安全を祈願したのであろうか。大物浦を出発した義経たちは、祈りもむなしく大風に吹き戻されやがて吉野の地に落ちていく。

今は埋め立てられ、海岸線は当時と比べると、はるか沖合いにある。埋め立てられた場所には、細長く伸びる公園があり、かつての大物浦の姿をしのぶことができる。

## 【駅家】うまや（単に駅：えき と記すこともある）

律令期に、街道に置かれた駅伝制の施設。30里（約16km）ごとに設けられ、駅長、駅子（えきし）を配置した。厩舎（きゅうしゃ）、宿舎、厨家（くりや、炊事施設）などが設けられて、役人の職務のための旅行などの際、馬を乗り継ぎ、食料などを補給した。街道の格付けによって、準備される馬の数が異なり、山陽道の駅家では20頭を常備することとされていた。

律令政府の変質に伴って平安時代中ごろからは衰退し、しだいに私人経営の宿がこれに替わるようになった。

## 【太政官】だいじょうかん

律令政府における行政の最高機関。八省を統括して政務全般をつかさどった。太政大臣、左大臣、右大臣、大納言で構成される公卿官（くぎょうかん）による審議を、少納言局、左右の弁官局が事務処理して、八省が実務をおこなうという体制がとられていた。

## 【山陽道】さんようどう

奈良時代に政府によって整備された、平城京から大宰府に至る道。古代では最大規模の街道で、幅6～9mの道路が直線的に設けられていた。平安京に遷都後は、起点が平安京となる。外国の使節が通行することが予想されたため、同様に整備された七街道の中で、唯一の大路に格付けされて最重要視された。途中には56駅が設けられていた。

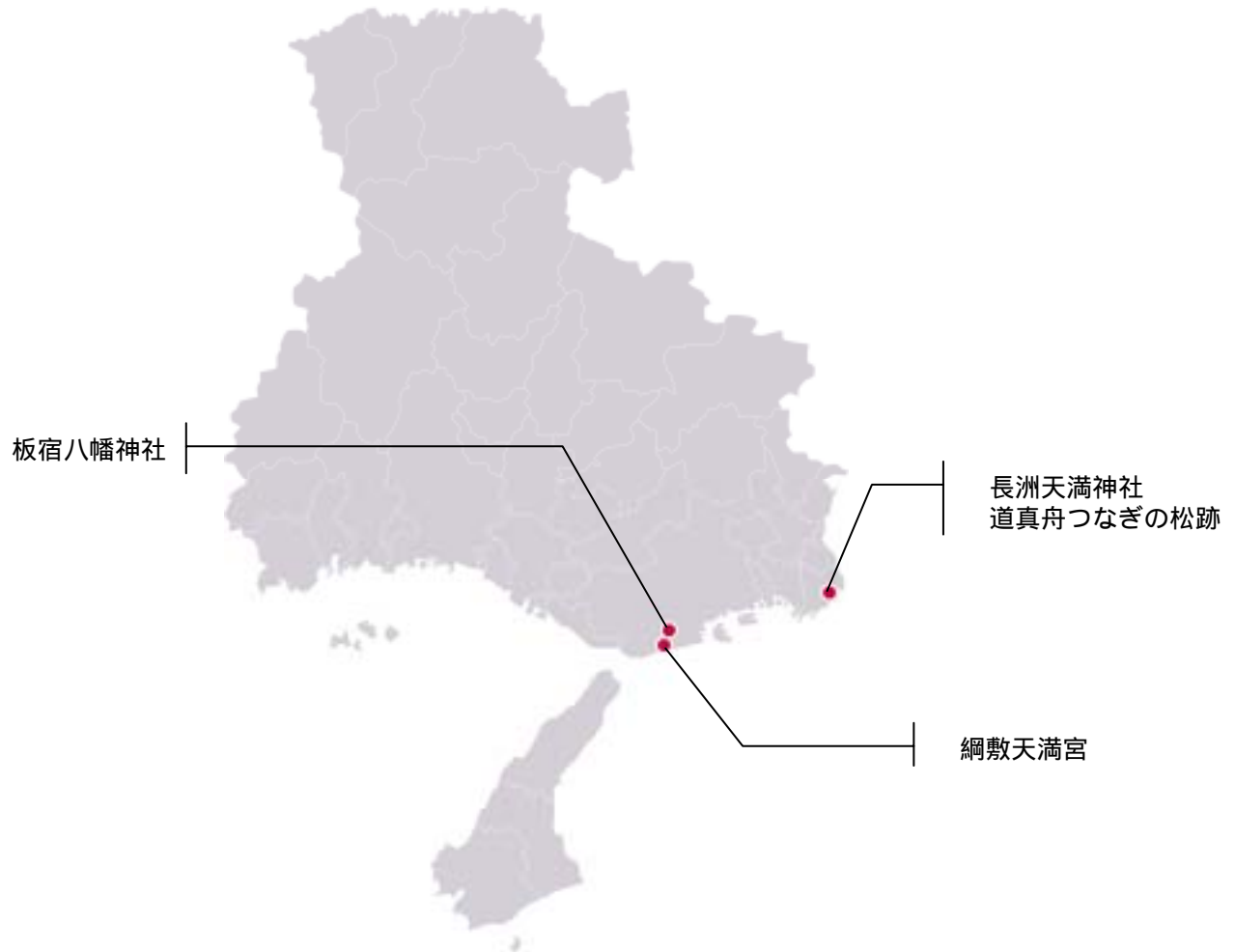
江戸時代には、古代山陽道を踏襲して西国街道が整備され、現在の国道2号線も一部で重複しながら、これに沿って設けられている。

## 参考書籍

	書籍名	刊行年	編著者名	発行者
伝説	尼崎市史 第10巻	1974	渡辺久雄編	尼崎市
	日本伝説大系 第8巻	1988	黄地百合子・酒向伸行・田中久夫・福田晃	みずうみ書房
歴史・文化等	尼崎市史第10巻	1974	渡辺久雄編	尼崎市
	兵庫のふるさと散歩1. 神戸・阪神・三田編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	神戸新聞出版センター
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	神戸の伝説散歩 兵庫ふるさと散歩11	1983	田辺真人	神戸新聞出版センター
	新版神戸の伝説 はりま伝説散歩	1998 2002	田辺真人 橋川真一	神戸新聞総合出版センター 神戸新聞総合出版センター



所在地リスト



長洲天満神社	尼崎市長洲本通3-5-1
道真舟つなぎの松跡	尼崎市長洲東通3-7-1
板宿八幡神社	兵庫県神戸市須磨区板宿町3-15-25
網敷天満宮	兵庫県神戸市須磨区天神町2-1-11

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 0792-88-9011

第1刷 2007年4月1日